

^ 13
2921
4世



門 へ 13
2921
巻 48

昭和九年
七月六日
購求

梅江書目編叙

あはれ 梅江の書目やその由来をいふ。今は

まづ 梅江の書目やその由来をいふ。今は

あはれ 梅江の書目やその由来をいふ。今は

一世の書目多し。梅江の書目やその由来をいふ。今は

梅江の書目やその由来をいふ。今は

いふはあまの樹のつゆのよきなりけり
白く珠の濃きよき樹のふゆの
あまのつゆの濃きよき樹のふゆの
少女あまのつゆの濃きよき樹のふゆの
よき樹のふゆの濃きよき樹のふゆの
よき樹のふゆの濃きよき樹のふゆの
よき樹のふゆの濃きよき樹のふゆの
よき樹のふゆの濃きよき樹のふゆの

いし山様のあまのつゆの濃きよき樹のふゆの
よき樹のふゆの濃きよき樹のふゆの
よき樹のふゆの濃きよき樹のふゆの
よき樹のふゆの濃きよき樹のふゆの
よき樹のふゆの濃きよき樹のふゆの
よき樹のふゆの濃きよき樹のふゆの
よき樹のふゆの濃きよき樹のふゆの
よき樹のふゆの濃きよき樹のふゆの

のたはる
いふはあまの樹のつゆのよきなりけり
よき樹のふゆの濃きよき樹のふゆの





Red seal impression at the bottom center of the left page.

梅の春

此乃割下法

二人連

蘭々



木葉楼

蘭々

一刺梅の春卷之十

江戸 為永春水著

第十九回

東安楽寺の杭糸 宰府天満官の別當 信祐と
 りる人 天神の御告めよりて 廻國 旅行の時公の御
 免を蒙りて 勸請 いらまて 官居を 天國の御
 梅の香をみるんと 懸くまじき 靈宝ありとや
 圓の曰世 俗童の 誇ふ 天國の 釵を 授けし時

雷雨烈しく止りまじきまふよるを鞆よりぬくも
接せりて思ふに思ふに言傳へりて是天國といふ
名を雨の縁ある極みを得且て天拜山の虚況を
實よりと思ふ童蒙の言出するおろろりて笑
みも足置説きまじきも知恩の爲ふまじきをいふ夫
天國といふに銀治の名ふし七神代の物といふおも
らむ神の授けしといふおもむきを柳天國とい
ふ皇四十二代文武天皇の御宇大室年間
の銀治を大和國宇具郡の住人ありその弟
に天座よりよ上りありつとも天國へ日本
銀治の名人十七人の中の一人名は名能の
おまじきも雷雨のりぬぬぬと今日天保
十二年より千百四十年の昔の古物のりぬぬ
珍宙より銀治のりぬぬ
夫の余てつぎ天満宮のは所ふ鎮守よりまは二百
餘年のりぬぬと東ふぬぬと春より夏は



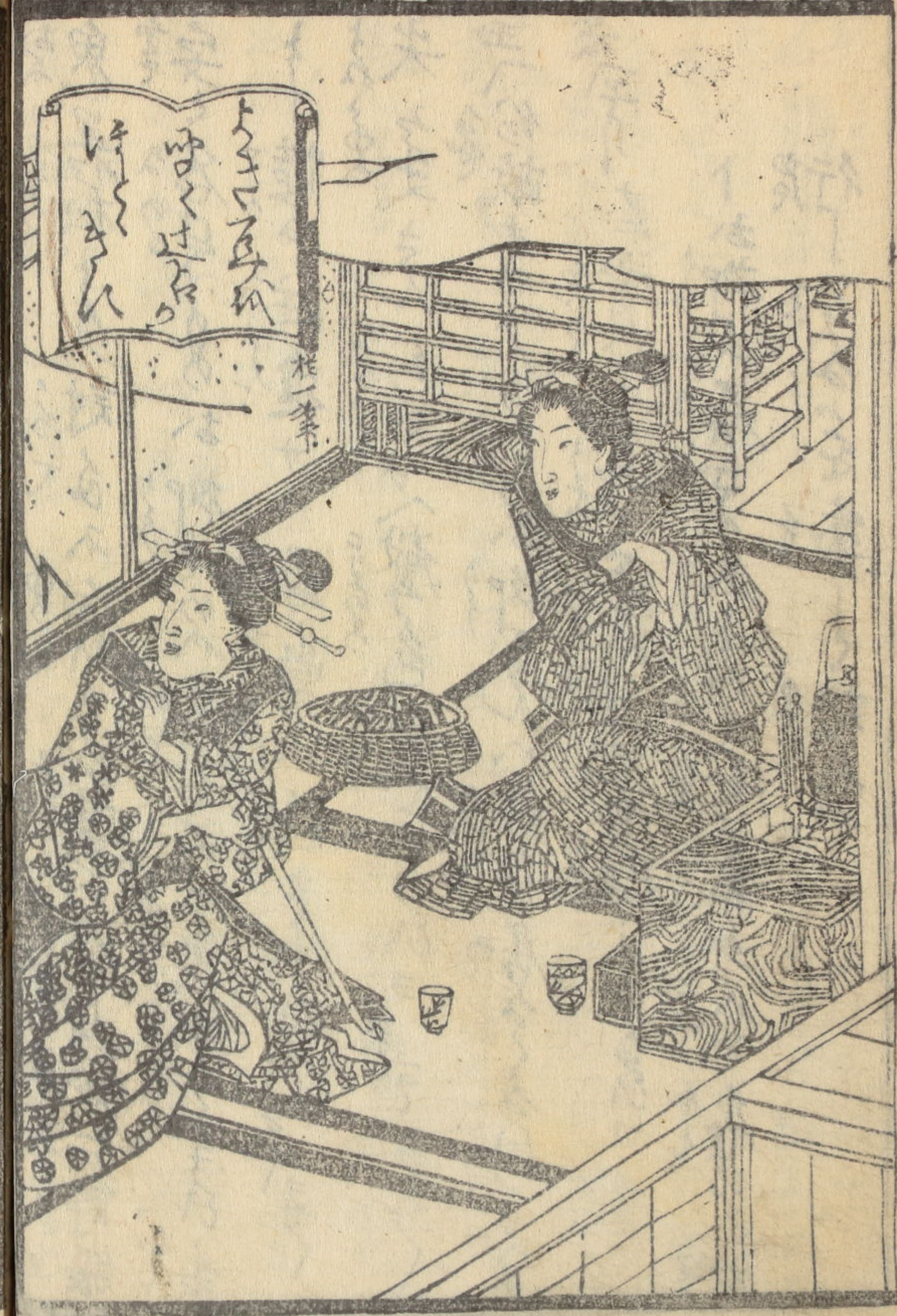
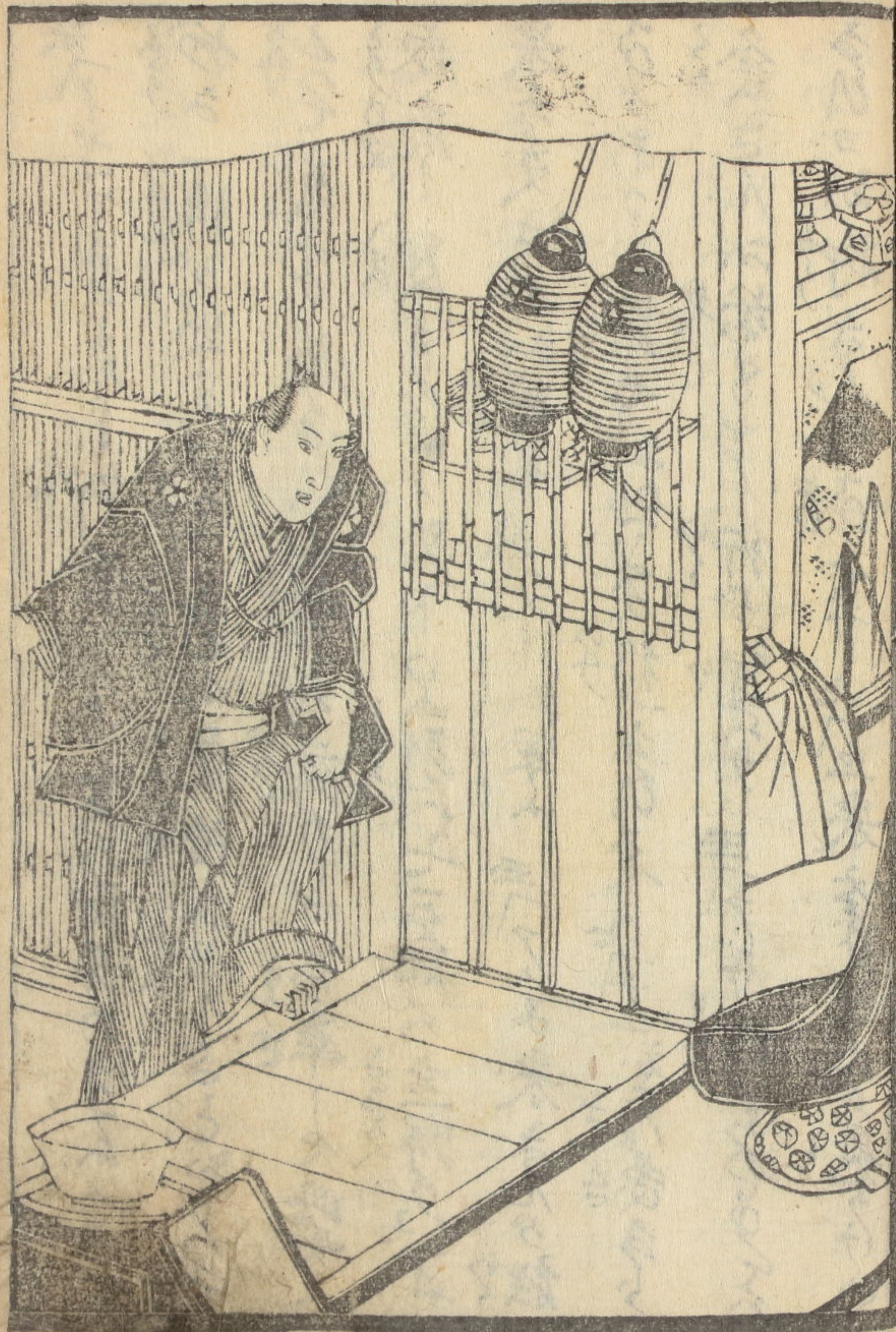
雨風ふり
あつた
梅うら

うちいさう我家へのきぐら津の田畑商家商人
家のまじり一路の向うふらふらとくく文ある人教八
重とお時へを冠つき片眼へ寄る橋みを見れへ文ある
ものへ十六七の娘めや白きまきの後高く脊後の
方を見うらうあざう身もあがりぬ走りり小石ふん
突て衝く記さう四辺を見まへー泣きぐと袖を顔ふ
ひて行くうらを小づみ何よお八重とお時生得やま
まきかろう巨細もわねと年ゆらぬ娘の教たふ泣

躰を見まじりまきふ家へやう叫まうぐらお時へ空
出言葉せうけんとまきおらもあさうふ。サリと隙
来る雨娘の先も初うなて茅家の軒ふ文入てまき
コびーまき空を見あが又お八重とお時を見つひ
公み終るく体まのうが女二人の外みまこ人教ありま
安堵しとまき一まきうまきと雨てまきわまきま
急の降出ーまきこまきう雨のまきまへお茶まきの付所
まきお出のまきまきまきまきまきまきまきのまき

お一人之ト聞れてさまが娘もか當惑せしが隠さ
さま言ふがまゝと申ひけん 一アノ少松の實父の
家の寺邊でござるもまゝの他舟へ止宿の處を居り
まゝに其の家より近所の風呂へ参りて途中で怖
目小出合を以て外をまゝにこのでござるも火ヨト涙ながら
の話をける

そもは娘のお柳よりとらぬせよと申へまゝり
から彼淡九郎が途中めて引捕へ辻で流ぬ
のませし野路を遠へるるに舟の急流九郎の足せ
外りける折しも悪漢らゝき者どもが出て淡
九郎を投劄しきかたのちともぬり流るるま
体の時淡九郎の巻物にせしおとゞ然てお柳の
淡九郎の捕へらまゝに現るる格ありて着後の
方を見くるとまゝの流火を遠へそ其うげぬ
淡九郎の言を言ひて火まらるる体を見
えしうが表道の野中怖しけまゝに捕へられて



多々度柳女たたらやなぎのむすめの身みも入いるあやう遠とほくお下くだの柳やなぎら
門かどにあり 終つひに世よ物ものが因より入いりしとておまをせ
はひを重おもよ七しちを弟あにとよとを何なにか方かたにせとおまをせん
たア七しちを弟あにとよ終つひに方かたにせとおまをせん
私わたくしを身み持もちの別べつ業ごうにお使つかふまわす
七しちを弟あにとよお目めお毎まいに文ぶんを弟あにとよ酒さけにお
あておのこ中なか身みらましまししとておひあがくまは澄すみの
文ぶん箱はこはさしおひを七しちを弟あにとよの儀ぎにおまをせん

七しちを弟あにとよ
八はちを弟あにとよ
く存ぞんぶ

目めを弟あにとよ
七しちを弟あにとよとけ身みが各おのお存ぞんぶとて唯ただごらふ
使つかへ中なかを口くち下くだとて解とくおまをせん 他ほか入いるおまをせん
月つきでち頼たのみお中なかを弟あにとよ七しちを弟あにとよ遠とほくおまをせん
七しちを弟あにとよお相あいあつた 何なにれも亀かめ井い戸とめ
使つかへお心こころおまをせんお頼たのみお中なかを弟あにとよ遠とほくおまをせん
使つかの男おとこへ 使つかへ左ひだりへおまをせん 右みぎへおまをせん

郎の捕まらぬと云ふは流火の如く七助と云ふ
 お八重と云ふとお時さまの仇殺を昨夜の夜に
 止宿をあやうひやまうところ此案ト云ふ
 先別案より其野の居ると云ふの分
 其家へ行て終結を言つて後迄
 先刻の咄もあつた
 行てよと云う
 ト云ふ此屋の人へは此の安堵の顔もな
 あり

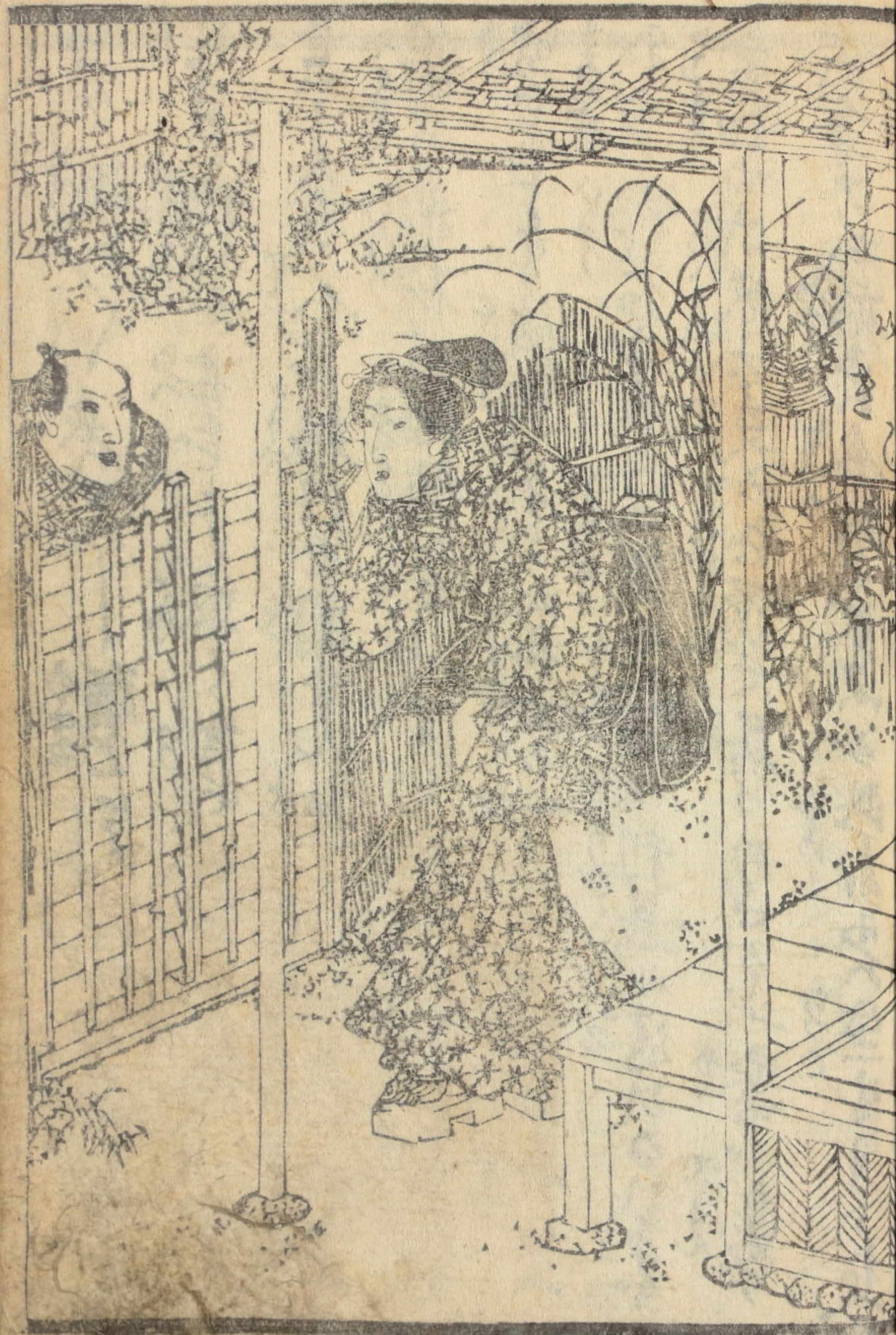
悦び言葉小豆七米を更と七三布八丈を
 調へ多ひで亀戸へおひきける
 斯く亀戸のお八重が庵へ米を平が別る不依
 福と助の顔も一時ふけふ一奇談松山福
 三圍の利益ふひく梅の春を二巻めて実を
 倍ふりのきり

狂訓亭主人誌

一刺 梅の春卷之十了

米を交へ先刻より兼ねと見えて 米へつづきぬしとて
信切のあまをとお柳をえさけ方へお頼ひゆくて
のを早く結せり 七三郎 米を交へて
私にお用がたうとてさうさう 七三郎 米を交へて
不恥なるを言ふ悪ひの子 米へつづきぬしとて
言ひあつて七三郎を伴ひて庵をゆく路七三郎へ

歩ゆみち米を交へて 七三郎 米を交へて
彼を引りたうて 七三郎 米を交へて
柳女を彼家へあけて 七三郎 米を交へて
信切の止宿を 七三郎 米を交へて
押の強ひあつて 七三郎 米を交へて
路をどきの毒を 七三郎 米を交へて



七ノイヤアお前おの分解ぶらふが此身おの坐るもろく板
七ノイヤアお前おの分解ぶらふが此身おの坐るもろく板
七ノイヤアお前おの分解ぶらふが此身おの坐るもろく板
七ノイヤアお前おの分解ぶらふが此身おの坐るもろく板
七ノイヤアお前おの分解ぶらふが此身おの坐るもろく板
七ノイヤアお前おの分解ぶらふが此身おの坐るもろく板
七ノイヤアお前おの分解ぶらふが此身おの坐るもろく板
七ノイヤアお前おの分解ぶらふが此身おの坐るもろく板
七ノイヤアお前おの分解ぶらふが此身おの坐るもろく板
七ノイヤアお前おの分解ぶらふが此身おの坐るもろく板

米ハナラ不鮮とのふるひる多実正のり初の心
おまより米をまへ大田系嘉北の息をい徳と助が
爰不見る尼と娘を氣纏ひふらぶる亦松山橋
芥へ代をふおらび一男が途中を被傷ふお人
らき一一條福と助がら我の路の辻堂まで頼見
合せたる尼の美器人相を時同く爰か思ふ
娘の人相がおお折ふ奴で在るゆゑ福と助
縁を傳ふき意程も値もとるてまへそのと男ふ

必お柳の身の上を尋ねしるを委しく語られ
十三郎の腰を渡して

ゴイヤをさるる多 亦妙不思議とも 何ともいふ事多
だのり 米へともろが 今被庵へ移て 着ると 尼心をさけ
近頃髪をけしきしことより 寺敷の庵主の 月情 人相が
旦那の好き通うと くらくひとりの ありさう 何れも
妙なるいふさるる 七ハテを 兵めりし ありさう 何れ
更なる遠のかけ 兵隊の 思ひの外 庵主の ありさう 何れ

因事主の 意流の 在と 移りし 来入 五五され
大文是 け身が 鑑定 ありし 遠のき 七ハテ 移りし
りへ 七ハテの 遠のき ありし ありし ありさう 来入 意
遠のき ありし けしき 正可 あり 真なる 事出 ありし ありさう
今 ありさう ありさう ありさう ありさう ありさう ありさう
移て けしき ありし 七 國を ありし 然る ありさう 若旦那 あり
成程 ありさう ありさう ありさう ありさう ありさう ありさう
活り ありさう ありさう ありさう ありさう ありさう ありさう

ついでにのどを差の輝く人々異稜娘のほろろり
美しき可憐なる人が目まぐるけきども六十五七
十の老女さん免言の経身ことまゝのうらまゝあつても可憐
さうごとく人のほろろりもまゝに極うらまゝにせよ
大それた世身と思へりや 米一斗年お終のりか限り
よのつらみのつらみの人懐かしくもさうさう
ゆづりも昔より然うさうさう 虚法師の七小町の青蓮堂
在成 米一斗程盛衰のりと思へり世の中の色を知る

のついでにのどを差の輝く人々異稜娘のほろろり
美しき可憐なる人が目まぐるけきども六十五七
十の老女さん免言の経身ことまゝのうらまゝあつても可憐
さうごとく人のほろろりもまゝに極うらまゝにせよ
大それた世身と思へりや 米一斗年お終のりか限り
よのつらみのつらみの人懐かしくもさうさう
ゆづりも昔より然うさうさう 虚法師の七小町の青蓮堂
在成 米一斗程盛衰のりと思へり世の中の色を知る

禁男甚助が 一へいお風呂が 漏りて 大ざわめ 申す
然久今ふお遣入を成ヨ 一へいお風呂が 漏りて 大ざわめ 申す
及込で 申す 一へいお風呂が 漏りて 大ざわめ 申す
先刻を 作付の 買物も 出て 来た 申す
松が 長おごろう 宗下 さんと 初七 お存な 申す
お賢と 松へ 一へいお風呂が 漏りて 大ざわめ 申す
入 申す 一へいお風呂が 漏りて 大ざわめ 申す

お二おごろう 一へいお風呂が 漏りて 大ざわめ 申す
松へ 一へいお風呂が 漏りて 大ざわめ 申す
お賢と 松へ 一へいお風呂が 漏りて 大ざわめ 申す
入 申す 一へいお風呂が 漏りて 大ざわめ 申す

志ひすへ 入るんのマアうまひもたぬのう出本座ん

か母堂さぬむらうぐらあざわもせんか居の善流ん

か入の敵人氣をも貴賤が修くくをた入のを認り

惜しめるる千人の中一人とあるまひとひん美羅

此密書で在るう尼の門てお仕業を成まんを

悔しむ修くか一朝の事へも不孝とけ率をを教

直しを修く七世の女修ふるまきまぶ修ひと流人の言

くく七居るもたぬのう何おぬくもと思へるまきるが

かきおまたぬのトとまきる時入養うけりもとを信

時の烟へ巻く叔父か八重の髪と湯田留の結ひ上

る妹と春の嫁しを今見と初元結命ま掛法白

髪と野暮る姿おひらまきと新ふ剣の中ざりの色

さ青き彩葉を結ぶ細う根の修ひ解て逢顔の

修りまきもまきるまきるとお時丹波

を修く七留の格好を修ひ見しり自傷をのり修り

余程よく修りまきるまきるとお八重の完全を修



初くお時のか八重が浴室の方へ移後脊骨をけを見送り
多う溜息を吐居らうける。

それぞやう かん けり 養ひ
支拂法の教へ一子出家まれば九族天小生まじと父
ども我神國の教ゆの思ひもよきを人のまらうとて感ある
後養育の恩報ふ父母を公抱し養育るべきあり
らむ昔唐土の老萊ふの身先老て猶兩親あり成
時鏡ふ向ひて我姿の老衰しつるを見ぞ思ふかや如此
かともへけ身を背るふ兩親の心な奈のまらん様子を

老人とありぬるふ彦とて親のけ身の体ハのむら老
さむかみぞ見甚しくらん 今の程も 常東ありとてぞ
悲しくや在まらん 心付て 髪髯を黒く 唇紅白移を
彩色のいと初病を類とて 彌戯目を見り 一に兩親の
様も我子まじを養ひつるを悦び樂しとらん
縁の傳は是則二十四孝の一人なる老萊ふの夏休と
け一徳を著すと 思女責男も其身をわらうとて
暮七親出達の心を安下 老萊の二の心を安下

梅のまゝ程お似合を成てお美譽をさかすは乃の
お形容も今日終日お終成りヨドレお昼の膳を
上をさう子へ今うう基助どんも涙りまうとお終る
肴を取らぬやうせう子今日お八重さる貴嶺の山延
生目もおさあまの目ゆのりひひおけれうらう様
同トるのそさあまのり子へ

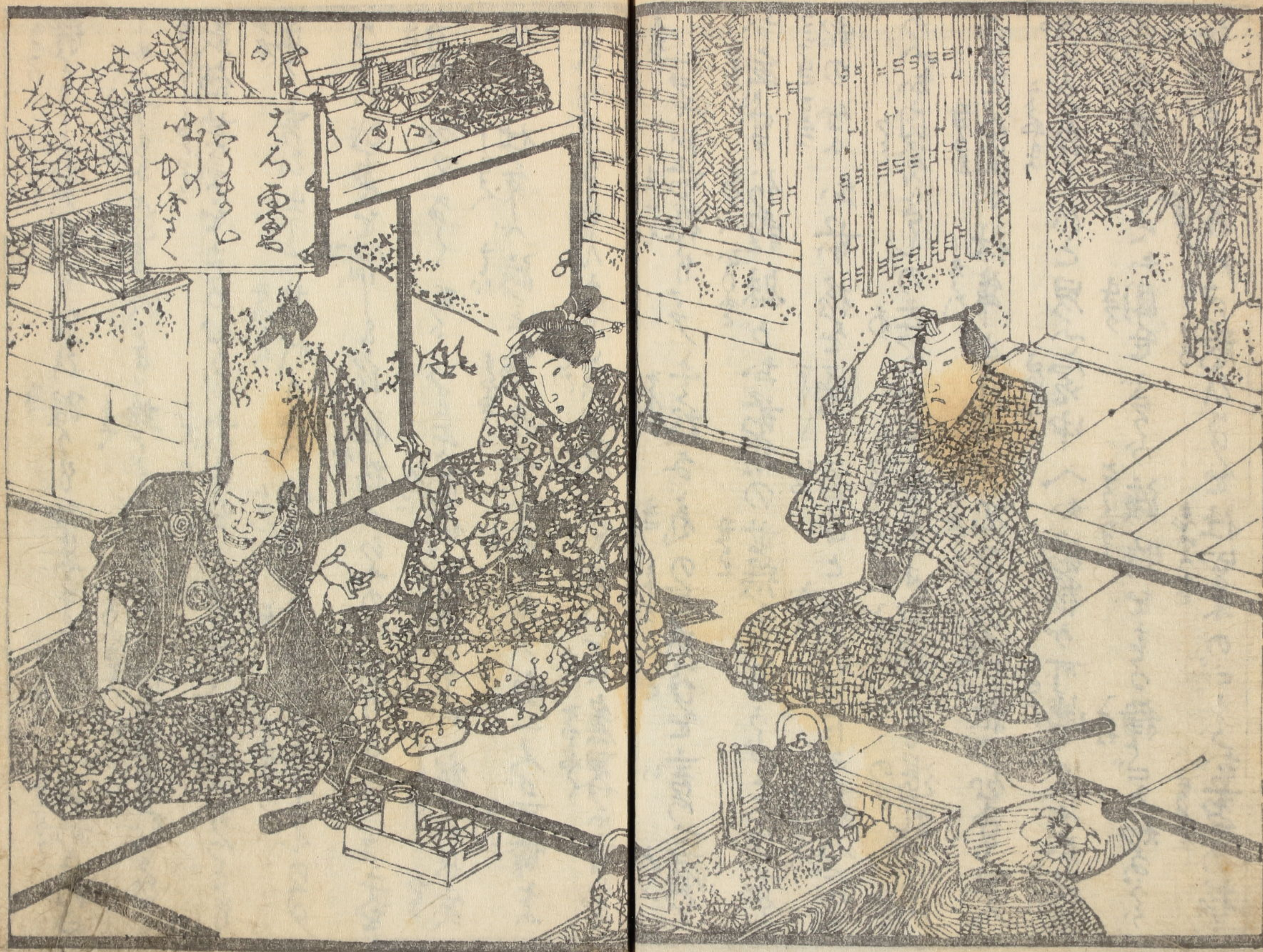
一刻梅の春巻之中了

一刻梅の春巻之十二

江戸 為永春水著

第九三回

梅のまゝ程お似合を成てお美譽をさかすは乃の
お形容も今日終日お終成りヨドレお昼の膳を
上をさう子へ今うう基助どんも涙りまうとお終る
肴を取らぬやうせう子今日お八重さる貴嶺の山延
生目もおさあまの目ゆのりひひおけれうらう様
同トるのそさあまのり子へ



種々しく見詰り思ひ限りも御座り候りの一日始りたる
よへ十多分迄は夜とも捨つてはしむる相を言されしは
取柄甚方とせむる公より大なるをとりて丑八おんみちりとも
早く言ひ出して甚代りへへ分極まるるを丑八さんのも
るべび身を惜しむる仕極まりのをありまはつて
おろしむるくあつては面割みまらるるに
出して仕業が後と落度でお在しむるお一人が可憐ま
てふらうもせんうらゝゝの縁も玉八とて縁界の言は

ささげとて男と女人 信切の義理の中にて和合するは
まもるる恋慕の情 言まきくも思ふ教もあつた
庭の草の露 西の入る日のくも多しは照くして赤き余
頼み殊更潤へしけれ拵り来たる渡り糸 中後門
口を押明家内をわめまきくも 共ハハイ此のト言
且て二人は鴛鴦さうく 七ハイか出は度す 共ハト三十三
克此の中より種々と正作さんの言を辨合す
ふとあきんぐ一旦途中も連せしとあきんぐして又眼

お柳の掛合をさるるえんぞと偽縁と言ふ来や
がらこのま。早く解らまいと只々耕さるひぞ。ふと
奴ど 與らく 松大膳のどそと 何のくす 何のくす
合兵乃ぬぞ 米へらくし 其松の松さるさん
鬼松の者女の叫ひ悪ゆか ちうひまを 四日月
お代官さるへ引きてま 秋てお仕度ぬる
そらご せう人 お柳の身の上 委しく 哀が 産の大
庄屋さるへ届けて お頼も 海で 実親の 正作さんぬ

月後一七夜にて 美松の家へ崩し七明地ふる川で
仕まひやしと 即時は 二味線草がはるのど。ア
ト言ひて 悪者 淡九郎も 南へ三 宮早き
あつりまゝるるを 寄るまゝら 猶負 憎みの 言解を
言ひちうしと居る 其好へ表の方ふ 人音一終
子声明て入お王 午参後 くらむらくと 立入来る
二三人が 淡九郎を 引捕へ 物も 言ふ 連行けり
美八 月おまき 松屋 物りまゝら 美八 松屋

あさうらつてハ 玉^{たま}何^{なに}あ^あしこのさうらうまへ 来^きへた^た二^に彼^{かの}奴^{やつ}ハ
淡^{たん}丸^わ糸^{いと}と^との^の門^{かど}へ^へ是^{こゝ}ま^まを^を種^{たね}く^くの^の西^{にし}の^のが^があ^ある^るさ^さう^うと^と夫^{つま}
は^は今^{いま}の^の糸^{いと}小^こ連^{れん}を^を初^{はつ}ま^まと^との^の玉^{たま}ハ^ハコ^コや^や然^{しか}久^く然^{ぜん}の^の味^{あじ}と^とま^ま
私^{わが}ま^まや^や先^{まづ}判^{はん}妻^{つま}ま^まを^を俵^{はたけ}門^{かど}へ^へ来^きま^まう^う何^{なに}と^と家^{いえ}内^{うち}と^とま^ま
言^いひ^ひま^まが^がま^まる^るう^うと^と不^ふ成^{じやう}を^をし^して^て居^ゐる^る来^きを^をま^まさん^{さん}が^が来^きて
お^お異^いで^で辭^{こと}お^おる^るさ^さう^うと^と言^いう^う宜^{よろ}し^しと^と思^{おも}ひ^ひて^て捨^すて^て置^おけ^け
遠^{とほ}入^いと^と春^{はる}後^ごも^も彼^{かの}人^{ひと}連^{れん}が^が續^つて^て遠^{とほ}入^いの^のさ^さう^うと^と腹^{はら}を^を洗^{せん}は
胸^{むね}が^がま^まご^ごど^どま^まく^く言^いひ^ひま^まの^の六^むト^と言^いひ^ひま^まを^を再^{また}度^{たび}驚^{おど}ろ^ろく^く棄^すて^て

七^{しち}三^{さん}糸^{いと}も^も胸^{むね}ト^とツ^つキ^きリ^り彼^{かの}淡^{たん}丸^わ糸^{いと}が^が高^{たか}敷^{しき}不^ふ言^ごる^るさ^さう^うと^と
玉^{たま}ハ^ハゴ^ご室^{むろ}あり^りて^て圓^{まる}く^くあ^ある^るさ^さう^うと^と思^{おも}ひ^ひて^て恥^はを^を恥^はし^しけ^け且^{かつ}ど
ま^まが^が知^しら^らぬ^ぬ類^{るい}不^ふ終^つら^らし^し七^{しち}一^{いつ}お^お玉^{たま}を^をや^やう^うと^とし^し玉^{たま}ハ^ハ
取^とり^りて^て止^とま^ます^すの^のが^が止^とま^ます^すの^のさ^さう^うと^と終^つて^て塩^{しほ}梅^{うめ}不^ふ早^{はや}く^く帰^{かへ}ら^らし^して^てハ
糸^{いと}さん^{さん}出^で番^{ばん}の^の尻^{しり}ハ^ハ止^とま^ます^すの^のさ^さう^うと^と人^{ひと}明^あ目^め不^ふあ^ある^るさ^さう^うと^と
夫^{つま}は^ハ先^{まづ}判^{はん}ち^ちよ^よひ^ひと^と煮^に花^{はな}屋^やへ^へ出^でて^て夫^{つま}は^ハ亦^{また}お^お祈^{いのり}の^の
お^おり^りて^てチ^ちヨ^よト^とと^と人^{ひと}寄^より^りま^まし^して^てハ^ハ玉^{たま}ハ^ハ然^{しか}久^く然^{ぜん}の^の味^{あじ}と^とま^ま
夫^{つま}は^ハお^お世^よ話^わさ^さぬ^ぬと^と七^{しち}ホ^ほニ^に米^{こめ}を^を夫^{つま}さん^{さん}が^が来^きて^て是^{こゝ}を^を

さしつかへなく、誤れなき事、
新く来たお早で、お門のつげ子へ、
正のりや、ありまは、久未、
那の咄、を考へ、免も角も、
さんの方へ、返させ、松と、
鬼若松へ、養育金と、考へ、
刻言、門へ、通り、鬼若松へ、
突親の正作といふ者、が、
玉

旅へ、出、七、何、も、角、も、
尋ねて、お、正作、さん、の、
お、奥、女、流、の、方、の、
つ、の、お、仕、へ、考、へ、
七、三、郎、さん、の、
お、柳、の、
意、の、
甘、ぬ、と、
玉



賤くハひるまひりくを兼ふお柳八振袖を着せらるる
人品能自然と野暮らるるまて生得ハ美濃けれ
隙の温順さきそ野暮ららるるあつるまひりくと思ふ所の
お八重と當世風の洒落たる乙女の風ふあーら入て
田舎の好意を衣帯を着せ髪も流しの結も
白下情な格で自然と人恥賤くぬ二人並ぶ
着る時ハひるまをよと見えへま正ふお八重と櫻の
花とて人天猶極少香の匂ひを流るるといへん

お柳と梅とて入てお柳の露をふくむ風情を
たりとりの念一お時へ着物で完ふ笑ひ
お二人さあまらるるお美濃おのまきうそ七
お旅お顔か何てお在ま成てお姉妹の格でおる
お身空手退けま尻のりか勿体まひ
さん其の流るるをいひまひりお結を野暮ららるる

多くは家へ伴ひ入る其病入の如く多の者を見則
け庵のお八重が知ふ慕ひあるとよる新川の嘉花の
畔を隠居所不病ひを保養して居る福之助より
けは隣りの内より透見せし七ありけるかお八重の
物り一多ト言ひ欠せんとせよか遠慮して病の
ひそく不噂けは 五ト驚うせざるは久ト老
出 善ハサテくは空も 病遠慮入はせんマア け間へ
お出るまゝあるまゝ一ヤテくは老也 病難癒を言ひあるまゝ

老く一也持病をく直ふお居りまゝあるまゝマア
お一おをとお休り 病成ま一病ぞ 病薬の持病
お出るまゝ久ト 病多きを言ひ病を言ひ病の助へ 福ハト
病も 病りてお出るまゝ久トお一 運しを悪ひ病
老く 病早大は病 病も 病を言ひ病を言ひ病を言ひ
病下まゝナト 病所へお八重入る方より 直出
病く一病は福之助の側へ来り 病ハト 病を言ひ病を
お居りまゝあるまゝあるまゝ梅の葉とやまゝ病の

あまのつゝのふのふの米を交の坐しを國を福と勤
八言お柳を片時もとましく見まわしよふ次
言とのふの如き一男と連て此庵の松よと着な
来りしか次郎者が俄の思ひ分るる筋め依て
虚病を疾一側近く寄をうるをまきしり
斯るのふの露やとも知れを入来る米を交七三郎も
糸香も玉八のうともお柳の逢んと相談とみ一此
程の所を世話のうらる返後のかめと種々の玉香

物かを持来し先お時を恨出し先達とより長く
元ぬふありしお柳のふを尻男女一同ふ礼と渡けれ
お時も相談の會然し七 三郎も誰人もおとつる成
さしサカく此より下のふ時にも福と勤と偶ふ来りし
次郎者の兼て米を交と分易け其の勝るの腹も
差出笑ひまきし 三郎も一や容さんけりし 三郎も
さんろあしひ折の途さうウ全体今月明日若日
那の折にお見舞ふ初めと思ひて居るのさか松がえ

纏つむひひををかか全ぜん枝えりりみみトト言いふふ次つぎ郎らう者もの宋そうをを受うけけししゆゆははららぬぬ
想おもひひままるるゆゆ久く剛こう近ちかくくままららみみ事ことななららばば次つぎ郎らう者もの宋そうをを受うけけししゆゆははららぬぬ
耳みみははららぬぬとと宋そうをを受うけけししゆゆははららぬぬ
口くちををままるる為ため目め那なととううドドレレくくままららみみ事ことななららばば次つぎ郎らう者もの宋そうをを受うけけししゆゆははららぬぬ
トト宋そうをを受うけけししゆゆははららぬぬ
お八はち重じゆうのの疾はや入いりり福ふく之の助すけのの方かたももののままららみみ事ことななららばば次つぎ郎らう者もの宋そうをを受うけけししゆゆははららぬぬ
宋そうをを受うけけししゆゆははららぬぬ
女めとと思おもひひ外ほかお八はち重じゆうのの方かたももののままららみみ事ことななららばば次つぎ郎らう者もの宋そうをを受うけけししゆゆははららぬぬ

難なん波は田でんのの寺てらありあり築ききき福ふく之の助すけのの方かたももののままららみみ事ことななららばば次つぎ郎らう者もの宋そうをを受うけけししゆゆははららぬぬ
世よのの物もの束たばぬぬ神かみとと佛ぶつとと引ひ合あせせゆゆ色いろ形かたちののままららみみ事ことななららばば次つぎ郎らう者もの宋そうをを受うけけししゆゆははららぬぬ
癸みづううののままららみみ事ことななららばば次つぎ郎らう者もの宋そうをを受うけけししゆゆははららぬぬ
お八はち重じゆうお柳やなぎ福ふく之の助すけ次つぎ郎らう者もの宋そうをを受うけけししゆゆははららぬぬ
七しち三さん帝てい王わう八はち条じょう寺てらをを治ちららみみ事ことななららばば次つぎ郎らう者もの宋そうをを受うけけししゆゆははららぬぬ
松まつ平ひら面めん白しろ可か笑わらむむとといいふふ事ことななららばば次つぎ郎らう者もの宋そうをを受うけけししゆゆははららぬぬ
世よのの物もの束たばぬぬ神かみとと佛ぶつとと引ひ合あせせゆゆ色いろ形かたちののままららみみ事ことななららばば次つぎ郎らう者もの宋そうをを受うけけししゆゆははららぬぬ

部と米を交がゆ時の間より謀合一船へ寄りしる
料理の教へ亀戸の茶屋より持来ればあれしる
駈へし目か度酒盛とありふける

は後お柳の福と助の本妻とありお八重の福と
助と助りを落ひ海に中より母親も集むれど
親類も彼目辨別をなするを秘録一且
啓次第といふものお夫婦の縁を落ひし人へ貞
操を立て居たりしもの今更福と助の本妻と

ある福と助の死をよゆふ等しくお影る所あり
是を理ふお柳と本妻と一けりお柳のお八重と姉と
教の睦しく語合一年の仲お一月の二月の外の
を連れて住居しりお大方にお八重と同お柳と
亦七言のまが露の実家へ帰る一玉八を晴て
女房と一玉八の糸をを撫ねせと終睦しく
姉妹のごとくまゐるを只一序の悦を一終く
おれも目か度様のとてまゐりしる

猶此外（あまのあぢ）ふ杉坂（しんがき）の（ま）を（ま）め（め）て嘉那（か）が（が）酒宴（しゆゑん）の（の）伴（ばん）の
 席（せき）の（の）奥女（おくによ）の（の）多（た）く（く）と（と）終（は）る（る）條（じょう）下（げ）も（も）あ（あ）る（る）且（かつ）正直（せいぢく）
 正作（せいさく）が（が）身（み）の（の）活（か）り（り）策（さく）弓（きゆう）繪（えい）巻（まき）の（の）三（さん）圍（ゐ）の（の）編（へん）者（しや）の（の）術（じゆつ）
 利益（りやく）靈（れい）驗（げん）等（とう）は（は）其（その）紙（し）の（の）説（せつ）及（およ）び（び）る（る）も（も）ん（ん）近（ちか）き（き）日（ひ）の
 中（ちゆう）に（に）格（かく）を（を）と（と）し（し）て（て）登（のぼ）り（り）ま（ま）し（し）て（て）あ（あ）る（る）要（よう）を（を）挿（さ）し（し）て（て）早（はや）く
 巻（まき）を（を）活（か）る（る）の（の）〜

鹿漏先生 鳥永春水述

一列 千金 梅の春卷之十二了

不
 二

